

認知行動療法による心理面接の会話分析研究概観

修士課程 1 年	小	原	聡一郎
博士課程 1 年	中	村	杏 奈
博士課程 3 年	浦	野	由 平
修士課程 2 年	荻	原	萌
修士課程 2 年	恩	田	豪
教授	下	山	晴 彦

はじめに

会話分析は、社会学者の H. Sacks が提唱した質的研究法である。会話すなわち“相互行為の中の発話 (talk-in-interaction)”を成立させている秩序の背景にある暗黙のルールを明らかにすることがその目的とされている (能智, 2011)。

会話分析の手法は明確に定義されていないが、概ね以下のような手続きに従う。まず、データには会話の録音あるいは録画が用いられる。会話の状況としては、研究者の影響が少ない自然状況が好まれる。研究者はそれを繰り返し見聞きし、詳細なトランスクリプト (文字起こし) を作成する。研究者はトランスクリプトの中から興味深いと思われるエピソードに注目し、そこで起っている現象について、自分の知識を用いて理解する。そのうえで、連鎖 (シークエンス) に注目して分析を行う (ten Have, 2012)。連鎖とは、会話において発話あるいは相互行為が順番に交代していく組織構造である (Psathas, 1995 北澤・小松沢 1998)。話者の話す順番 (ターン) や、2 つのターンの連鎖である隣接ペアが連鎖を分析する上での主な単位となる。

会話分析はもともと対等な個人同士のやりとりを研究対象としていたが、現在では制度的場面における会話分析も発展してきている (能智, 2011)。制度的場面とは、教育や法や医療などの専門的な場面・活動であり、この中には心理療法による心理面接も含まれる。

心理療法における会話を扱った会話分析の研究の初期のものは、Vehviläinen, Peräkylä, Antaki & Leudar (2008) によってレビューされている。Vehviläinen et al. (2008) はそれまでの心理療法を扱った会話分析研究によって明らかとなった Th あるいは Cl の会話行為を

(a)Th の受容行為 (Therapist's recipient actions)、(b) Th の開始行為 (Therapist's initiating actions)、(c)Cl の反応行為 (Client's responding actions) に分類した。その上で、それぞれの行為について、会話における働きと、治療の効果の可能性がまとめられている。

Vehviläinen et al. (2008) でレビューされている研究は、いわば心理療法一般を対象に分析を行った研究である。一方、近年では個別の心理療法のアプローチに着目し、特定の心理療法に基づいた面接場面を扱った研究も行われている。そこで本稿では、そうした研究の中でも特に認知行動療法およびその派生として位置づけられる心理療法のアプローチに焦点を当てた研究を概観する。

会話分析を用いた認知行動療法面接の研究

文献レビューにあたり、検索データベース (Web of Science) 上で “conversation analysis” と、“cognitive therapy” もしくは “behavior therapy” を含む論文を検索し、分析・考察において認知行動療法の会話的特徴に特に焦点を当てている内容の論文を選択した。分析対象が対面の個人面接でないもの、異文化間セラピーにおける人種問題を扱っているもの、要旨のみの文献は本稿では除外した。以上の結果、10本の論文が選定された。以下では、研究グループごとにその結果を概説する。本稿ではまず Peräkylä らによる研究を紹介し、続いて他の研究者による研究について述べる。

Peräkylä らによる研究

選定された10本の論文のうち、6本はPeräkyläと共同研究者によって執筆されたものであった。Web of Scienceにおける被引用数が、他の研究者による4本の

論文は0～2回(平均1.3回)なのに対し、Peräkyläらの論文は3～19回(平均10.3回)であることから、彼らの研究が本領域における主流をなしていると言えるであろう。Peräkyläを中心とした認知行動療法の会話分析の研究は、特定の心理療法の特徴に注目した最初期の研究と、精神分析との比較を行った研究とに二分される。**最初期の研究** 認知行動療法による面接が中心的なテーマとなっている会話分析研究として、Voutilainen, Peräkylä & Ruusuvaori (2010a, 2010b, 2011) は最初期のものである。これらの研究は、特定の心理療法におけるThの行為やCIの変化を会話分析を用いて捉えようとした試みとして位置づけられる。

Voutilainen et al. (2010a) は、特定の心理療法における実践について心理療法理論を通してではなく会話分析を用いてアプローチするという狙いのもと、構成主義的認知療法 (cognitive-constructivist psychotherapy) においてThが患者の感情体験に関する表現にどのように反応しているかを詳細に記述することを目的として研究を行った。分析に用いたデータは、特定のThと患者の間で行われた構成主義的認知療法による面接の録音から書き起こされた20時間分のトランスクリプトである。データにおける、患者の感情体験に関する表現に続くThの発話の中から、(a)患者が表現した内的体験に焦点を当てている、(b)患者への返答の行為として、意見表明 (statements) や患者のターンの延長 (extensions) や先行する患者の発話の定式化 (formulations) といった形をとっている、という2点を満たすものを対象に分析が行われた。分析の結果では、Thは患者の感情体験に対して承認 (recognizing) と解釈 (interpreting) の2種類の反応を行うことが示されている。承認の発話では、Thは問題を患者の視点を通して見ることで、Thがその感情を理解していることを伝えるだけでなく、患者の感情をリアルで妥当なものとして扱うことが指摘されている。一方で、解釈の発話は、語られた問題に関連してCIの経験にThが新たな視点を与えるものである。承認と解釈は行動的には重複することがあり、承認はそれ単体で行われることがあるが、解釈は通常承認の要素も含んでいることが指摘されている。また、2種類のThの反応はいずれも患者の内省的な語りを目的としていることが述べられている。具体的には、承認は患者の同意的な発話を導き、その後Thが解釈を続けることを可能にする。そして、解釈は患者の語りを問題と関連づけたものに行うことができると述べている。結論においては、承認は感情中心の治療的行動、解釈は認知・意識中心の治療的行動とそれぞれ位置付けられている。そのうえで、

解釈に先立って承認が行われ、また解釈が承認の要素を含むことから、より認知的・解釈的な行動のためには先んじて情動的・共感的な応答が必要であると述べている。

Voutilainen et al. (2010b) は、心理療法的な相互作用において、患者が第三者を批判した際に、専門家が患者にどのように同調を示すかを探索的に検討した。データはVoutilainen et al. (2010a) と同じものが用いられた。分析では、患者が身近な人に関するネガティブな体験について説明し、Thがそれに返答したシークエンスに焦点が当てられた。データでは、患者のネガティブ体験の語りには体験に関連する第三者への批判的態度が含まれており、Thの返答はその第三者の行いに焦点を当て患者の批判的態度を共有するものであった。こうしたThの第三者への批判的態度の表明がどのような役割を果たしているかが分析によって示された。Thの返答は(a)患者の批判を承認する (confirm the patient's critique)、(b)枠としての認知的推論 (cognitive reasoning as a frame) の2種類に分類された。(a)患者の批判を承認する発話では、Thは患者が示した批判を理解・認知するだけでなく、そのスタンスを共有することが示されている。日常では、話者が相手の批判・文句に付け加える形での会話は批判をターンごとに過激化していくことが先行研究で指摘されているのに対し、この文脈での「批判」は心理療法の一側面として、患者の問題となっている経験やそれに対する考えを議論する題材にすぎないため、患者もセラピストも批判に終始することなく次に移ることができることが指摘されている。(b)枠としての認知的推論の発話は、自分に落ち度があり他者に怒る資格がないという患者の信念に挑戦 (challenge) するものであるとされている。患者の問題となる経験に対して、患者の感情的な反応を妥当なものとしなしている点が治療的に働くことを指摘している。以上の分析によって、Voutilainen et al. (2010b) は、専門家の非中立性は制度的な営みの逸脱ではなく、むしろ専門家にとってまさに制度的な課題を達成するための道具であることを示唆している。

Voutilainen et al. (2011) は、構成主義的認知療法のプロセスにおける治療的变化を会話分析によってとらえるために、Thの介入に対するCIの反応が時間に応じてどのように変化するかを検討している。データはVoutilainen et al. (2010a, b) と同じものが用いられ、セラピーの中で患者と母との問題を扱った複数の回に注目している。分析では、Thの断言 (conclusion) とそれに対する患者の返答に焦点が当てられた。Thの断言とは、患者によって遠回しに表現されている患者

の母に対する批判的な姿勢を指摘すること、および患者の自責的な反応を指摘することである。これらの断言を通して、Thは母への失望や怒りを自責感情に変容させてしまう患者の傾向を治療的に扱っていった。分析の結果、患者の反応はセラピーの過程で(a)断言の拒否 (Rejection of the Conclusions)、(b)曖昧な反応 (Ambivalent Responses)、(c)承認と賛成 (Confirmation and Agreement) のように変化することが示された。(a)断言の拒否の段階では、患者はThの断言の後に沈黙した後、断言そのものを受け入れられないことを認め、より議論を深める発言をしている。(b)曖昧な反応の段階では、患者は躊躇しながらThの断言を肯定し、その後撤回している。(c)承認と賛成で患者がThの断言を認め、強く賛成する段階に至ることで、問題をそれ以上扱う必要がなくなると述べられている。この研究により、Thが同じ対応を示すとしても、患者の治療的变化の過程によって見られる反応が異なることが示されている。このような縦断的な検討を行うことで、会話分析が患者の治療的变化を捉える手段として、他の分析を補完するものとして利用できる可能性が示唆された。

以上の3つの研究は、構成主義的認知療法という特定の心理療法の特徴に焦点を当て、Thと患者の相互的なやりとりにおける行為の特徴や働きを明らかにした。これらの研究は、対象を特定の心理療法に限定したことで、従来の会話分析研究よりも克明に個別の心理療法における実践の実際の姿を捉えることに成功していると言える。**精神分析との比較** Weiste & Peräkylä (2013, 2014) およびWeiste, Voutilainen & Peräkylä (2016) は会話分析を用いて認知療法と精神分析の比較研究を行っている。

Weiste & Peräkylä (2013) は、Thが用いる定式化 (formulation. 直前の相手のターンに対してその内容の説明を提供することで、その内容を理解したことを示す発話) に注目し、心理療法の主な2つのアプローチである精神分析と認知療法について比較研究を行った。データは対象関係論的精神分析のセッション30例と、構成主義的認知療法のセッション23例の録音である。録音は、各療法につきそれぞれ1名の熟練Thが担当した2つのケース (合計4ケース) からとられた。分析では、まずデータから定式化のシークエンスを抽出し、定式化の内容、語彙、社会的行為の含意に注目して分類を行った。その後、2つの療法における定式化のタイプの分布を計算した。分析の結果、データに見られた定式化は(a)強調する定式化 (highlighting formulation)、(b)換言する定式化 (rephrasing formulation)、(c)移転する定式化

(relocating formulation)、(d)誇張する定式化 (exaggerating formulation) の4種類に分類された。(a)強調する定式化では、Thは直前のClのターンの中の治療的に重要な要素 (Clの体験についての感情的な説明など) を繰り返して用い、ThがClの説明を聞いて理解したことを示すとともに、Clの語りの継続を促す。(b)換言する定式化では、ThはClの説明の中の主観的な体験に着目し、一般的・抽象的な心理学の用語を用いて換言し、問題に対するThの視点を提供するとともに、Clの自らの体験へのさらなる注目を促す。(c)移転する定式化では、ThはClによって語られた体験を異なる時・場所での体験と結びつけ、他の体験の象徴的代表として扱う。この定式化はThの解釈の準備あるいは伝達につながることが指摘されている。(d)誇張する定式化では、ThはClの発話をありそうもない、不条理なものとして言い換え、Clに挑戦する。これらのタイプの療法間における分布の比較では、データ中の定式化の総出現数は2つの療法間ではほぼ等しかった。各タイプの出現率は、(a)強調する定式化と(b)換言する定式化の出現数は、療法間で違いが見られず、Clの語りに理解を示したり、内省を促したりするのは特定の療法に関わらず志向される、治療の核となる実践であることが示唆された。一方、(c)移転する定式化はすべて精神分析において、(d)誇張する定式化はすべて認知療法において出現したことから、(c)は精神分析理論で重視される「解釈」に、(d)は認知療法理論で重視される「非機能的な考えへの挑戦」に関連した、個々の療法に特化した定式化であることが考察されている。

Weiste & Peräkylä (2014) は、Clへの共感を伝えるThの発話の音韻的特徴について会話分析を用いて検討した。データはWeiste & Peräkylä (2013) で用いられたのと同じケースの録音から、精神分析のセッション40例と、認知療法のセッション30例の録音が用いられた。分析ではまず、Clが感情的体験を説明し、ThがClの感情を定式化しているシークエンスを収集した。続いてそのシークエンスに続く発話、すなわちThの定式化の直後のClの反応と、それに次ぐThの発話に注目したところ、それらは(a)承認の軌道 (Validating trajectory) と(b)挑戦の軌道 (Challenging trajectory) の2通りの軌道を描くことが示された。(a)承認の軌道は、まずThの定式化に対してClがそれを追認し、それに続く発話でThがClの感情を合理的で理解できるものとして扱い、すなわち承認 (validating) するものである。(b)挑戦の軌道は、Thの定式化に対してClが追認あるいは否定し、それに続いてThがClの説明を評価しそれに挑戦する (challenging) ものだとされる。その後、そ

それぞれの軌道について、コンピュータソフトを用いて音韻的側面の分析を行った結果、(a)承認の軌道に先立つThの定式化は、イントネーションとリズムにおいて直前のCIのターンから連続しており、また直前のCIのターンよりも低く静かな声で発せられ、音域の幅は直前のCIのターンよりも狭かった（音律的連続 prosodic continuity）。(b)挑戦の軌道に先立つThの定式化の発話は、イントネーションとリズムにおいて直前のCIのターンと連続性がなく、また直前のCIのターンよりも高く大きな声で発せられ、音域の幅は直前のCIのターンよりも広がった（音律的分離 prosodic disjuncture）。以上の分析により、Thの定式化において、発話の音律的連続はThの承認の態度を、音韻的分離はThの挑戦の態度をCIに伝達し、これらの音韻的特徴がその後の相互作用の軌道を決める鍵となっていることが示唆された。考察では、Thの定式化の語彙的な構成がThの認知的理解を伝えるのと同時に、音律的連続が共感の感情的側面を伝達する役割を担っていると述べている。なお、この研究では療法間の結果の違いは見られなかったが、これは各療法のデータが1人のThに依拠していることによる限界であると述べられている。

Weiste et al. (2016) は、心理療法的相互作用においてThは他者であるCIの内的経験を直接的に知ることはできない（認知的非対称性 epistemic asymmetries）ことを指摘したうえで、ThがCIとの認知的非対称性を扱うために用いる定式化や解釈の方法について、精神分析療法と認知療法の療法間で比較した。データはWeiste & Peräkylä (2014) と同じものを用い、CIの個人的経験の説明に続くThのターンに着目して、ThがCIとの認知的非対称性を扱うために繰り返し用いているターンの構成を探索した。分析の結果、CIとの認知的非対称性を扱うThのターンは(a)CIの体験の共同描写 (Co-describing The client's experience) と(b)解釈の根拠 (Evidential grounding) に分類された。(a)CIの体験の共同描写では、ThはCIの経験に関する語りを定式化し、新たな見方による描写を付加するが、その内容は最初にCIが説明した内容に近似している。こうしたターンはCIの直前のターンを参照していることを示す小辞 (and, that, so等) によって導かれ、その発話がCIの発話に追従するものであることを示すことで、Thはその認識の根拠を明示しなくてもCIの経験にアクセスしていることを示すことができるとされる。このときのThのターンは直前のCIのターンと音律的に連続していることが示されている (Weiste & Peräkylä, 2014)。(b)解釈の根拠は、内容的には直前のCIの内容を

超える意味づけを持つ解釈であり、CIと同じ語彙を用いて直前のCIの説明をまとめることで、直前のCIの発話に立脚したものであることを示す。こうした解釈は推定を示す助動詞や副詞および疑問形を伴い仮説として発話されるか、Th自身の視点から語られたものであることが強調される。こうしてThは自分がCIの体験を直接的に知りえないことを強調しつつ、CIが直接アクセスできないTh独自の推論に基づいた解釈であることを主張することが示されている。療法間の比較では、認知療法では(a)CIの体験の共同描写が多く見られ(b)解釈の根拠がほとんど見られなかったのに対し、精神分析では両者がほぼ同数見られた。このことから、認知療法と精神分析では認知的非対称性へのThの向き合い方が異なることが示唆された。

会話分析を用いて療法間の違いを検討した以上の研究では、それぞれの療法の理論ではなく実践の中で実際に行われている行為に基づいて、個々の療法の特徴や、療法の違いを超えた治療の普遍的要素が示された。また、これらの研究で扱われているテーマは、「共感」や「解釈」や「非機能的認知の再構成」など、心理療法の理論においてはごく基本的な常識として扱われがちな技法や概念と深く関連している。これらの研究では、こうした技法や概念を実際に行われている会話行為という現象として捉えなおし緻密に記述すると同時に、これらの技法や概念を会話という規範に基づいた営みの中に統合的に位置づけている。

他の研究者による研究

主流であるPeräkyläらのグループの他に、EkbergらやJargerらも会話分析を用いて認知行動療法面接の研究を行っている。Ekbergらは、認知行動療法においてCIの行動変容を促すThの働きかけと、それに対するCIの反応に焦点を当てている。Jargerらは、弁証法的行動療法におけるThの発話の治療的な働きに着目している。

行動変容の提案と抵抗 Ekberg & LeCouteur (2014) は、認知行動療法においてThがCIの行動的な変容を達成するためにどのような会話的リソースを用いてCIを巻き込むか (co-implicate) を探索した。分析データは、アデレードのCBTによる治療を専門とするクリニックで、9人のThと19人のCIによって行われた20のCBTセッションの録音をもとにしたトランスクリプトである。セラピーの中で行動活性化について話し合われた34の部分について分析が行われた。分析によって、ThはCIを意思決定に巻き込むために下記のような体系的なターンの構造を用いることが明らかになった。まずThは情報請

求の質問 (information-soliciting questions) を用いて、CIが生活の中で実行可能な行動の変化を提案するように求める。情報請求の質問は、“yes”の返答が好まれるように文法的に構成されることが指摘されている。CIは情報請求の質問に対して行動変容の選択肢を挙げる。続いてThはCIの提案を是認する。是認の返答をすることで、ThはCIが提案創出の過程 (suggestion-making process) に積極的に関わっていることをあらためて主張すると述べている。また、提案創出の過程はThによって導かれる相互作用的な達成であると述べたうえで、Thは先取 (anticipatory completion)、(再) 定式化 (re-) formulation)、間接話法 (reported speech) などといったターン構成を用いて積極的に提案創出の過程を導くことが示された。これらのターン構成は、ThがCIの提案を作り変え (re-shape) ながら、それでもなお提案がCIに帰属することを示すことで、CIが行動変容に責任を持ち、エンパワメントを得て自身の回復に自信を持つことを可能にすると述べている。また、ThがCIに提案や意見を求めることなく行動変容を提案した場合、その提案はCIの抵抗を招くことが同時に示された。このCIの抵抗に関しては、次に述べるEkberg & LeCouteur (2015) によって議論されている。

Ekberg & LeCouteur (2015) は会話分析を用いて、CBTのセッションにおいて行動変容を促すThの提案へのCIの抵抗について検討している。データおよび分析の対象はEkberg & LeCouteur (2014) と同様である。分析の結果、CIは提案された行動変容を実行できないことについて、下記の3タイプの根拠のいずれかを用いてThからの提案に抵抗を示していた。3タイプとは、(a) 制限的な状況要因に訴える、(b) 固定された身体的状況に訴える、(c) Thが提案してきた物事への以前の努力を主張する、である。これらの3タイプの根拠は、Thが知ることのできないCIの個人的経験から導かれた知識によって理由づけを行っている。CIは自身の経験に対するアクセスの優位性を利用することにより、Thからの提案を拒否する権利を最大限に引き出していることが指摘されている。考察では、こうした抵抗のパターンは単にCIの変化に対する拒否というだけにとどまらず、問題に対するCIの認知的・義務的な態度を主張するものであり、治療目標の達成を妨げ、行動変容の実行可能性を低下させ、治療関係を貧弱なものにすると述べている。その上で、行動変容の提案に含まれる繊細な含意についてより自覚的になることがThの利益となると述べている。

Ekbergらの研究により、認知行動療法においてCIの行動変容を達成するためにThがCIを巻き込む方法と、

それに失敗した際にCIがどのように抵抗するかが示された。これらはセラピーの成功において重要なCIの動機づけに関わる部分であり、動機づけの成功と失敗の例を会話分析の視点から詳細に記述した重要な知見と言える。

弁証法的行動療法のThの発話の治療的側面 Jarger et al. (2015) は、CIの治療的な進歩を示す行動の報告に対してThが与える肯定的評価がどのような相互作用をもたらすかについて、会話分析を用いて検討している。データはオランダ児童青年メンタルヘルスケア協会で行われている弁証法的行動療法 (DBT) の個別セッションの録画から、全セッションのうち最初の3回分を用いた。データの中で、ThがCIを褒めた30の場面について分析を行っている。分析によって、ThはCIによって報告された行動を肯定的に評価する際、同じような形式を用いることが示された。CIの行動について評価するやりとり (evaluation project) は、必ずCIによる行動の報告に続いて起こる。行動の報告から行動を評価するやりとりへの移行は、Thが発話する“okay”などの談話標識 (discourse marker) によって明確に合図される。談話標識の後にはThの賛辞 (complement) が続く。多くの場合、Thの賛辞に対してCIは発話を行わず、Thは賛辞に続いて賛辞の根拠 (account) を述べる。このような一連の評価のやりとりに関して、治療的な観点から以下のような考察がされている。まず、CIの行動の報告に隣接してThが賛辞を表明することで、ThはCIの行動の強化を促すことができる。さらに、賛辞に続いてその根拠を明確にすることによって、ThはCIの行動だけでなく、Thの賛辞の根底にある規範、すなわち治療的目標を強化するのである。

Jarger et al. (2016) は、Thの質問に対するCIの「分からない (I don't know)」という回答 (IDK 反応) に注目し、IDK 反応に伴うCIとThの相互作用について検討した。データはオランダ児童青年メンタルヘルスケア協会で行われているDBTセッションの録画である。2名の女性Thがそれぞれ3人のCIを担当した。分析にあたって、各CIごとに3セッションを無作為に抽出し、その18パターンの個人セッションにおける77のIDK 反応とそれに続くThの反応を分析した。分析の結果、Thの反応は(a) IDKに関連する反応を続けない (No IDK-related continuation)、(b) 再質問 (Redoing of the question)、(c) 回答候補の提案 (Proposing a candidate answer)、(d) セラピー特有の技術の援用 (Employing therapy-specific techniques)、(e) IDK 反応の問題についてのメタ・トーク (Meta-talk on the problematic nature of the IDK-response) の5つのカテゴリーに分

類された。(a)IDKに関連する反応を続けない場合には、ThはIDK反応を問題のない、あり得る回答として扱う。ThはCIのIDK反応の直後に、CIがさらに話す機会を与える発話を続けたあと、IDK反応を受容していることが示されている。(b)再質問では、ThはIDK反応を不適切なものとして扱い、より適切な回答をする機会をCIに提供するため再度質問した。(c)回答候補の提案では、IDK反応はCIが適切な回答を選択する上での問題を表示するものとして扱われ、Thは質問をyes/noクエスションに言い換えてCIが答えられるようにした。(d)セラピー特有の技術の援用では、IDK反応はCIが答えに至るための精緻で協働的な治療的相互作用を引き起こしているとされる。CIは本当に答えを知らないものと見なされ、したがってIDK反応は適切で真摯な回答として扱われた。質問と回答のシークエンスを繰り返しながら、Thは治療的技法を用いてCIが答えを見つけるための手助けをした。(e)IDK反応の問題についてのメタ・トークでは、IDK反応は問題のある回答として扱われ、IDK反応の問題のある性質についてメタ的に話し合われた。先行研究やDBTの教本では、IDK反応はCIの非協力的側面を表しているとされており、それに触れることでCIとThの関係に悪影響を与えることが指摘されていた。しかし本研究では、ThはIDK反応をただの非協力的な行動として扱うのではなくCIが自身の思考・感情・行動に示唆を得るきっかけとして治療的に利用していることが示され、ThはIDK反応後のコミュニケーション方略を訓練することでCIの非協力的行動への対処能力を高めることができるであろうと結論づけている。

Jargerらの研究は、CIとのやりとりにおけるThの発話の構造や形式、内容についての特徴を記述するのみでなく、そうした特徴が弁証法的行動療法に基づく面接の中でどのように治療的に機能しているかを検討している点で特徴的であると言える。

考察

本節では、まず前節で紹介した複数の研究によって得られた知見の意義を述べる。続いて、本稿で認知行動療法面接を対象とした会話分析研究に焦点を当ててレビューを行ったことの意義を考察する。最後に、本領域におけるさらなる研究の展望について論じる。

前節で紹介した研究では、認知行動療法に基づいた心理面接における様々な場面で、ThやCIがどのような目的のためにどのような方法を用いて会話を遂行するかが明らかにされた。これらは、共感や解釈、非機能的認知

の再構成、動機づけ、肯定的評価による行動の強化などといった既存の概念を、実際に会話の中でこれらがどのように達成されているかという視点から捉えなおし、詳細に記述したものである。これらの知見は、上述したような既存の概念について、理論ではなく観測された現実に基づいたモデルを提示することを可能にした点で意義深いと言える。例えば、共感に関する論考はこれまでさまざまな言われているが、具体的に「何を」すれば共感が達成されたことになるのかという点については、「傾聴」や「反射」などといった素朴な技術による説明にとどまってしまうことが多い。他方、Weiste & Peräkylä (2013) で論じられている種々の定式化やWeiste & Peräkylä (2014) で示されている共感的発話の音韻的特徴、Weiste et al. (2016) でThがCIとの認識的非対称性を扱う方法として挙げられた体験の共同描写などは既存の共感の概念と関連していると考えられる。そのため、これらの知見を用いて、「何をすれば共感であるか」という問いに対して具体的なモデルを提示することが可能になると考えられる。こうしたモデルはThの技術の習得の助けとなることや、実証研究において共感などの既存の概念が扱われる際にその概念を明確に定義できることなどが期待される。

続いて、本稿で認知行動療法面接の会話分析研究をレビューしたことの意義について述べる。本稿では、認知行動療法の研究において焦点が当てられることが少ない、面接内の会話という切り口に焦点を当てた。認知行動療法は科学的に効果が実証された諸技法の集成であるため、各技法の効果に関する研究は数多くなされている一方、実際の臨床場面でどのようなやりとりによって治療が提供され進行していくかという観点に立った研究は数が少ないように思われる。本稿は、会話分析を用いた認知行動療法に関する研究の動向を紹介し、認知行動療法による治療を成立させている臨床場面でのやりとりに注目する意義を提示している。

最後に、本領域におけるさらなる研究の展望について述べる。まず、研究の対象を限定し、特定の職域や特定の特徴を持ったCIなどに焦点を当てることが考えられる。本稿で概観した研究は、認知行動療法およびその中に位置づけられる個別の心理療法アプローチに対象を限定することで、個別の心理療法における会話的特徴の詳細な記述を可能にしていた。今後、さらに特定の職域に焦点を当てたり、職域間の比較研究を行うことで、先行研究とはまた異なるローカルで詳細な知見が得られる可能性がある。また、先行研究では会話の参加者のコミュニケーション能力には言及がなされてい

いが、実際の心理援助の現場ではCIの病理や発達傾向、知能水準によってCIのコミュニケーション能力が質的・量的に多様にわたることが考えられる。CIのコミュニケーション能力の特徴が、会話におけるCIあるいはThの発話行動に影響をもたらす可能性は否定できない。よって、CIの特徴に焦点を当てた研究を行うことでその影響を検討することが可能となるだろう。また、先に述べた通り、本稿で紹介した研究の知見は心理療法における種々の既存の概念に対して詳細なモデルを提供し、それらの概念を再定義できる可能性がある。これらの研究の知見を統合しモデル化した上で、量的な検証の手続きを踏むことで、より汎用性の高い知見とすることができであろう。最後に、会話分析は会話という言葉に大きく依存した活動を分析対象にしたものであるため、日本語の心理面接では海外の先行研究と異なる現象がみられる可能性がある。類似の研究がほとんどない本邦において、日本語の面接データを用いて先行研究の追試を行うこともまた意義深いものと思われる。

本研究は、科学研究費基盤研究A 16H02056「心理職の活動を拓げるインターネット版認知行動療法の開発とプログラム評価」の支援を受けて行われた。

引用文献

- Ekberg, K. & LeCouteur, A. (2014). Co-Implicating and Re-Shaping Clients' Suggestions for Behavioural Change in Cognitive Behavioural Therapy Practice. *Qualitative Research in Psychology*, 11(1), 60–77.
- Ekberg, K. & LeCouteur, A. (2015). Clients' resistance to therapists' proposals: Managing epistemic and deontic status. *Journal of Pragmatics*, 90, 12–25.
- Jager, M., De Winter, A. F., Metselaar, J., Knorth, E. J., Reijneveld, S. A. & Huiskes, M. (2015). Compliments and accounts: Positive evaluation of reported behavior in psychotherapy for adolescents. *Language in Society*, 44(5), 653–677.
- Jager, M., Huiskes, M., Metselaar, J., Knorth, E. J., De Winter, A. F. & Reijneveld, S. A. (2016). Therapists' continuations following I don't know-responses of adolescents in psychotherapy. *Patient Education and Counseling*, 99(11), 1778–1784.
- 能智 正博 (2011). 質的研究法 下山 晴彦 (編集) 臨床心理学をまなぶ6 東京大学出版会
- Psathas, G. (1995). *Conversation analysis: The study of talk-in-interaction*. Thousand Oaks, Calif: Sage.
- (サーサス, G. 北澤 裕・小松 栄一 (訳) (1998). 会話分析の手法 マルジュ社)
- ten Have, P. (2012). Ethnomethodology and conversation analysis. In H. Cooper, P. M. Camic, D. L. Long, A. T. Panter, D. Rindskopf & K. J. Sher. (Eds.). *APA handbook of research methods in psychology, Vol 2: Research designs: Quantitative, qualitative, neuropsychological, and biological* (pp.103–117). Washington, DC, US: American Psychological Association.
- Vehviläinen, S., Peräkylä, A., Antaki, C. & Leudar, I. (2008). A review of the conversational practices in psychotherapy. In A. Peräkylä, C. Antaki, S. Vehviläinen & I. Leudar (Eds.). *Conversation analysis and psychotherapy* (pp. 188–197). Cambridge, England: Cambridge University Press.
- Voutilainen, L., Peräkylä, A. & Ruusuvuori, J. (2010a). Recognition and Interpretation: Responding to Emotional Experience in Psychotherapy. *Research on Language and Social Interaction*, 43(1), 85–107.
- Voutilainen, L., Peräkylä, A. & Ruusuvuori, J. (2010b). Professional non-neutrality: criticising the third party in psychotherapy. *Sociology of Health & Illness*, 32(5), 798–816.
- Voutilainen, L., Peräkylä, A. & Ruusuvuori, J. (2011). Therapeutic change in interaction: conversation analysis of a transforming sequence. *Psychotherapy Research*, 21(3), 348–365.
- Weiste, E. & Peräkylä, A. (2013). A Comparative Conversation Analytic Study of Formulations in Psychoanalysis and Cognitive Psychotherapy. *Research on Language and Social Interaction*, 46(4), 299–321.
- Weiste, E. & Peräkylä, A. (2014). Prosody and empathic communication in psychotherapy interaction. *Psychotherapy Research*, 24(6), 687–701.
- Weiste, E., Voutilainen, L., & Peräkylä, A. (2016). Epistemic asymmetries in psychotherapy interaction: therapists' practices for displaying access to clients' inner experiences. *Sociology of Health & Illness*, 38(4), 645–661.

(指導教員 下山晴彦教授)